

BPT026-03

会場:201B

時間:5月24日 14:45-15:00

## ミャンマー中央部の新第三紀後半の環境変動に伴ったヤマアラシの進化 Evolutionary change of porcupines in the late Neogene of central Myanmar

西岡 佑一郎<sup>1\*</sup>, ジン・マウン・マウン・テイン<sup>2</sup>, タウン・タイ<sup>3</sup>, 江木 直子<sup>1</sup>, 高井 正成<sup>1</sup>  
Yuichiro Nishioka<sup>1\*</sup>, Zin Maung Maung Thein<sup>2</sup>, Thaung Htike<sup>3</sup>, Naoko Egi<sup>1</sup>, Masanaru Takai<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 京都大学霊長類研究所, <sup>2</sup> マンダレー大学地質学部, <sup>3</sup> シュウェボー大学地質学部

<sup>1</sup> Primate Research Institute, Kyoto Univ., <sup>2</sup> Mandalay University, Myanmar, <sup>3</sup> Shwebo Degree College, Myanmar

ミャンマー中央部を縦断するイラワジ川とその支流域には、河川成の新第三系イラワジ層群が広範囲に分布しており、これまでに多数の陸棲脊椎動物化石を産出している。我々は本層の下部とされるチャインザウク地域の堆積物（上部中新統～下部鮮新統）と、上部に相当するグウェピン地域の堆積物（上部鮮新統～下部更新統）を中心に調査を進めており、本研究では産出した齧歯目ヤマアラシ属（*Hystrix*）化石について報告する。

これまでの調査によって、チャインザウク地域から1種（*Hystrix* sp. nov.）、グウェピン地域から2種（*H. cf. zhengi*, *H. cf. brachyura*）のヤマアラシ類が見つかった。チャインザウク地域の種は非常に大きく、半高歯冠型の頬歯をもち、その頑強な下顎骨やオトガイ孔の形態はこれまで発見されている *Hystrix* と区別されることから、未記載種と考えられる。その形態的特徴は同年代の南アジアや中国で発見されている種よりもヨーロッパやアフリカの種と近いが、系統関係については厳密な議論の余地がある。

一方、グウェピン地域から発見された *H. cf. zhengi* は中国の上部鮮新統から下部更新統にかけて産出している種に類似しており、チャインザウクの種よりも小型でやや歯冠が高い。動物相の比較に基づくと、イラワジ相はインド・パキスタンのシワリク相と類似しているが、東アジアの動物相との共通性は低い。しかし、グウェピンから発見された *H. cf. zhengi* は中国の要素であり、鮮新世後半から更新世前半にかけて、ミャンマー中部と中国の間で動物相の交流があったことを示唆している。

*H. cf. brachyura* は東南アジアに生息する現生種に対比され、*H. cf. zhengi* よりも小型で高歯冠型の頬歯をもち、同義種として、中国南部の下部更新統から多産する *H. subcristata* が知られているが、グウェピンの *H. cf. brachyura* とは頬歯の歯冠サイズが近く、両者の関連性は高い。また、東南アジアにおいて *H. brachyura*、およびその類似種はグウェピン地域が最古の化石記録であり、少なくとも前期更新世には東南アジア内陸部に出現していた可能性がある。

チャインザウクの哺乳類化石相とその古環境は Zin-Maung-Maung-Thein et al. (2010) が報告しており、産出化石の安定同位体分析に基づくと、当時は現在よりも湿潤環境であったが、徐々に乾燥化が進行していた過程にあったことが示されている。一方、グウェピン相をチャインザウク相と比較したところ、森林棲の種が減少していることから、より疎林環境であった可能性が高い。こうした気候変動に伴った動物相の変化は *Hystrix* にも現れており、高歯冠種の出現はミャンマー中部の乾燥化を支持する結果となった。

キーワード: ミャンマー, ヤマアラシ, 新第三紀, イラワジ層

Keywords: Myanmar, *Hystrix*, Neogene, Irrawaddy sediments